

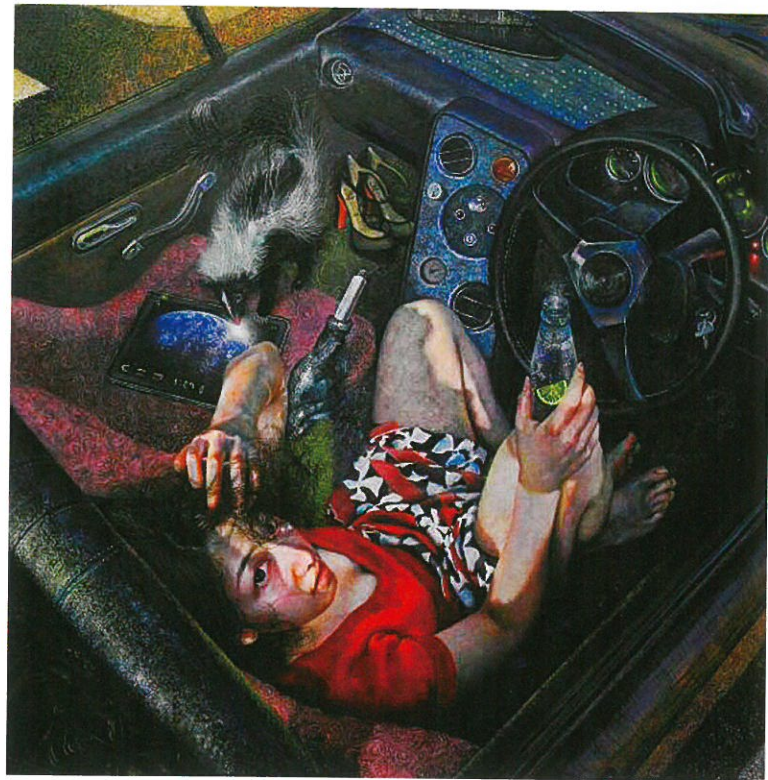
2 新人

福島万里子の華麗なるデビュー

文 佐々木豊

昭和会受賞記念
福島万里子展
2014.2.13~25
日動画廊(銀座)

2014
アート・オブ・ザ・イヤ



《物想いの夜のロードムービー》2010年頃 50S 油彩 第47回昭和会展特別賞

「福島万里子氏の『熱帯夜ハート』で今年の大賞は決まりと思っていた。しかし、そうはならなかった」と審査評に書いた。2009年に開催された第6回世界絵画大賞展(世界堂主催)である。そして、次のように結んだ。「福島氏はしつこさが魅力。この表現力は大したものだ。どんな人なんだろう?」

この審査で私は進行役だった。交通整理に気を取られて、自分の意見はどうしても控えめになる。結局福島氏は四番目の東京都知事賞に落ち着いた。だが、展覧会で改めて絵を見ると、福島氏は断然輝いていた。このときの悔いが残っていたのであろう。一昨年の日動画廊の昭和会展の最終審査では「この絵を賞にしない手はない」と主張した。すると、同調してくれた人物がいたのである。

この人物こそ、伝説のコレクター松村謙三氏である。とにかく格好いい。日動画廊の玄関に大型のリムジンが登場する。車のドアがあく。両側に長身の黒い背広が二人、その間を足早にすり抜けて、静まり返った審査員席の最前列中央にどかんと座る。長谷川徳七社長の審査開始の挨拶が始まって、数秒が経過した頃である。まるで、テレビが映し出す閣議に臨む首相である。

しばらくして日動画廊を訪れる

と、昭和会展の受賞作はもちろん、その後持ち込まれた福島作品はすべて売れているという。そして、今年、2014年2月後半の初個展となり、完売を果たしたのである。春にふさわしいホットニュースとなった。会期半ばにアトリエから追加した絵まで赤丸がついた。松村氏も大作を買ってくれたという。

個展会場で初めて福島万里子氏に会った。あのSTAP細胞の小保方氏に似た色白の可愛いタイプ。地下の個展会場から、福島氏はわざわざ玄関まで見送ってくれて、画廊のスタッフの前で最敬礼。舞い上がった私はつい、「どうだ、俺の目に狂いはないだろう」と口走ってしまった。

遠藤彰子のような画家に

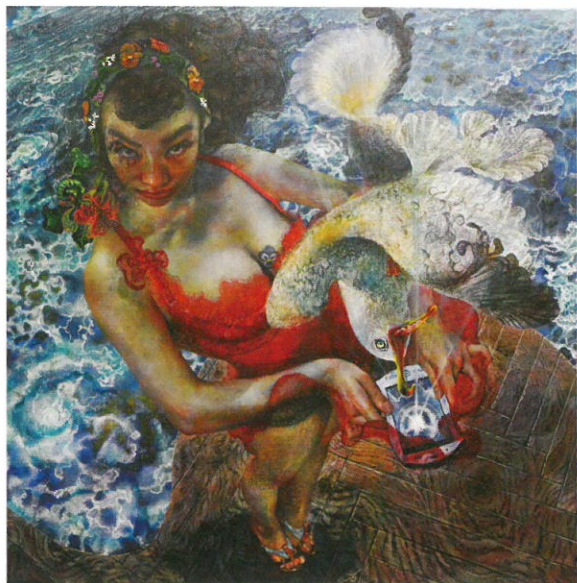
2006年に、茨城県つくば美術館で開かれた師の遠藤彰子の個展を観て、こんな画家になれたら、と福島氏は思ったという。その時、氏は武蔵野美術大学の学生だった。遠藤彰子氏に招かれてこの個展の初日に私も居合わせたのだが、ワシオ・トシヒコ氏など、評論家に比べて同業者が少ないのが気になった。だが、会場全体にみぎる熱気を、教え子がいっかり受け止めていたのである。

私は福島氏こそ、遠藤彰子氏の後継者の第一候補だと思う。この師と

もたらすのだろうか?

心配なことが一つだけある。遠藤氏が写真を使わないで人物が描けるのに対し、福島氏は、今のところ写真を元に描いていることだ。もちろん写真からしか描けない魅力もある。たとえば、細部のリアリティや写真のみが捉え得る人物の奇妙なポーズの瞬間などである。いま、流行のあの個性性を持った細密描写の群れの中に福島氏が埋もれてしまうことを恐れる。写真を使うのが悪いわけではない。コピー機に墮すことを危惧するのである。

来年は福島万里子の勝負の年になる。アートフェア東京で個展を開く予定だという。今、4メートルの大作に挑んでいる。日動画廊のブースは必見である。(洋画家)



《高気圧のハリケーン》2010年 30S



《熱帯夜ハート》2009年頃 30S 油彩 第6回世界絵画大賞展 東京都知事賞



福島万里子と《a park of illusion》
2009-2012年 80S 油彩 撮影:安達康介

ふくしま・まりこ

1984年生まれ。2007年武蔵野美術大学油絵学科卒業。09年第6回世界絵画大賞展東京都知事賞受賞(10年同優秀賞)。12年第47回昭和会展特別賞。13年アート台北出品(日動画廊ブース)。14年日動画廊にて個展